

ツインマーマン  
ユビュ王の晩餐のための音楽

ツインマーマンのお気に入りの作家の一人であるアルフレッド・ジャリの不条理劇「ユビュ王」を題材とした作品である。1896年にパリで初演された際には、辛辣な台詞に大スキャンダルを起こし、演劇界、芸術家たちに大きな影響を与えた。ツインマーマンの音楽もユビュ王のイメージを彷彿させる先人達の様々な作品をコラージュしたアイロニーに満ちた挑発的な作品である。引用された作曲家、作品名、スタイルは楽譜に各々記載されている。ボリス・ブラッハー、ヴォルフガング・フォルトナー他の過去の芸術院のメンバー、ストラヴィンスキー、ヒンデミット、オネゲル、ヘンツェ、ダツラピッコラ、シュトックハウゼン他、自作を含み同時代に活躍した作曲家達、バッハ、ベートーヴェン、シューベルト、ベルリオーズ、ワーグナー、等による西洋音楽史上の偉大な作曲家達による作品、ルネッサンス舞踊、ポロネーズ、行進曲、クール・ジャズ、ブルース、ブギウギ風といったスタイルなど、詳細に記載され引用されている。1小節のみの短い引用から、同時に別の楽器で異なる作品を引用していることもあり、徹底した目まぐるしい引用はまるでザッ

ピング(頻繁にリモコンでチャンネルを切り替えテレビ視聴する行為)しているようでもある。ウィンド・オーケストラにジャズコンボ、エレキギター、マンドリン、オルガン、ハープ等も加わった特殊な編成で音響的にも凝っている。作品は劇のイメージから7部で構成されており、フィナーレは、同時代、同郷で、敵対視していたシュトックハウゼンの《ピアノ曲IX》の冒頭の旋律が強打で繰り返される中、同時にベルリオーズの幻想交響曲から「断頭台への行進」、ワーグナーの「ワルキューレの騎行」が断続的に登場し突如終わる。洗練された管弦楽法、音楽語法で構築された彼の手腕、前衛的なイデオロムと過去の音楽文化を折衷したアプローチ方法で独自の世界観を表現している。

作曲=1962-66年

初演=1968年1月31日 ベルリン(ルドルフ・アルベルトの指揮/ベルリン放送交響楽団)

編成=フルート3(ピッコロ持替1)、オーボエ3(イングリッシュ・ホルン持替1)、クラリネット3(バス・クラリネット持替1)、ファゴット3(コントラファゴット持替1)、アルト・サクソフォーン(テナー・サクソフォーン持替1)、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ2、ギター2(マンドリン持替1、エレキ・ギター持替1)、バス・ドラム、スネア・ドラム、テナー・ドラム、シンバル、トライアングル、タンブリン、テンブルブロック、カウベル、ギロ、マラカス、鞭、チャイム、タム・タム、ヴィブラフォーン、ハープ、ピアノ、チェレスタ、オルガン、コントラバス4、コンボ(クラリネット、コルネット、エレキ・ギター、エレキ・ベース)

細川俊夫  
月夜の蓮—モーツァルトへのオマージュ—

この作品は、北ドイツ放送(NDR)からモーツァルトのピアノ協奏曲を1曲選び同じ編成でモーツァルト生誕250周年記念のための作品委嘱を受けて作曲されたもので、初演のピアニスト、児玉桃に捧げられている。作品では、モーツァルトのピアノ協奏曲第23番を選び、嬰へ短調の2楽章をテーマとして使用している。細川俊夫には、「花」、「蓮」、「開花」をテーマにしたいくつかの作品があり、『音楽で花の持っている力を想像し、それを歌うこと聴くことによって、花の持っている宇宙的な力を人間の生きる力に変換していきたい』と語る。特に東洋の神秘的な花の代表として「蓮」の生態系に関心を持ち、花が開くまでの神秘的な瞬間と、内に秘められた永劫の時の流れをオーケストラとピアノで精緻に表現している。「蓮の花」はピアノにより、「水」や「自然」はオーケストラにより象徴化されている。持続音の嬰へ音は、水の表面の振動を表現している。細川自身、作曲中に『静かな月夜、蕾が膨らみかけた蓮の花が月夜に包まれ、開花に向けて夢のような微睡みに落ちて

いき、夢の中で、モーツァルトの音楽への憧れがかすかに表現されていく。』ようなシーンを想像していたと語る。そのイメージは、譜面にセクションごとに記載されている次のような詩的な表現：『ためらい』『開花への憧れ』『泥の中から少しずつ頭をもたげる』『沈滞/泥の内』『月の光が蓮に降り注ぐ』『光と影』『夢』からも音楽とともに想像できる。冒頭のピアノソロは、『静寂なエコーのように』、『歌うように』と記載されており、瞑想的な静寂に響き渡るハーモニーが、オーケストラに溶け込み神秘的な豊かな音響で散りばめられる。最後の『夢』のシーンでは、モーツァルトのピアノ協奏曲第23番2楽章の出だしを引用し、モーツァルトへの敬意とともに、風鈴やりんなどのベルの音色とともに残響の中に融けていく。

作曲=2006年  
初演=2006年4月7日 ハンブルク(児玉桃の独奏、準・メルクルの指揮/北ドイツ放送交響楽団)  
楽器編成=ピアノ独奏、フルート、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、バス・ドラム、タム・タム、アンティーク・シンバル、ジャパニーズ・ウインドグロックン、ヴィブラフォン、グロックンシュピール、おりん(ティンパニの上においたもの)、弦楽5部(第1ヴァイオリン、第2ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバス)

ブラームス[シェーンベルク編]  
ピアノ四重奏曲第1番ト短調 作品25

1937年にナチスを逃れてロサンジェルスに移住することになったシェーンベルクは、同様の境遇で同地にいた指揮者クレンペラーの提案によりブラームスの《ピアノ四重奏第1番》のオーケストラへの編曲を実現し、クレンペラーにより初演された。原曲は、ブラームスが28歳の時にベートーヴェン、メンデルスゾーンの影響を受けて作曲した初期作品であり、彼特有のモチーフ展開や独創的な楽章配置など、構造的な面でも意欲的な作品である。シェーンベルク自身、チェロ、ヴィオラのパートを実際に演奏し原曲を知り尽くしていた作品である。長さ、構成は原曲を尊重し、色彩豊かな管弦楽法による編曲を行う。ピッコロ、バスクラリネット、コールアングレなどブラームスの使わなかった管楽器を含む3管編成に打楽器を加えた編成で、楽器の改良により、ホルン、トランペット、トロンボーンなどの金管楽器も早いパッセージや旋律楽器として多用している。弦楽器に関しては、細かくディヴィジし、異なった奏法による音色の変化も工夫されている。

強弱記号においても、各楽器のダイナミクスが注意深く指定してある。ピアノの音が大きくなりがちで弦楽器が全て聴こえないことが多い点を解決した作品に編曲することがこの作品に決めた理由の一つでもあった。彼の初期の作品はブラームスから影響を受けており、エッセイ『革新主義者ブラームス』の著作も残しブラームスに精通していた。

1楽章

ト短調、ソナタ形式。第1主題を3種類の音域の異なったクラリネットによりオクターブで重ねて始まる。再現部は第1主題第2句から始まり古典的シンメトリーを避けており、管弦楽法でも意識的に工夫されている。

2楽章

ハ短調、3部形式による幻想的な間奏曲。ダブルリードであるオーボエ、イングリッシュホルンと弱音器付きの弦楽器の持続音で主題を始める。トリオは、変イ長調で5小節単位の変則的な構成。

### 3楽章

変ホ長調、3部形式による牧歌的なメロディの緩徐楽章。中間部は、打楽器群により強調された付点リズムを特徴とした行進曲風。

### 4楽章

ト短調。ジプシー風ロンド。様々な奏法を応用しブラームスより荒々しく構成。冒頭の伴奏音型の弦は、弓の木部で叩く奏法(コール・アングレ)で、ハンガリー・ジプシーの民族楽器のツィンバロムを模している。カラフルな管弦楽法、3小節周期のリズミカルな舞曲的な熱狂で盛り上げる。

作曲=1861年 編曲=1937年

初演=[シェーンベルク編曲版]1938年5月7日 ロスアンジェルス(オットー・クレンペラーの指揮/ロスアンジェルス・フィルハーモニック)

楽器編成=フルート3(ピッコロ持替1)、オーボエ3(イングリッシュ・ホルン持替1)、E♭管クラリネット、クラリネット2(バス・クラリネット持替1)、ファゴット3(コントラファゴット持替1)、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、バス・ドラム、スネア・ドラム、シンバル、トライアングル、タンブリン、グロッケンシュピール、シロフオーン、弦楽5部(第1ヴァイオリン、第2ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバス)



MUSIC PLAZA LTD.

株式会社 ミュージックプラザ

〒460-0008 名古屋市中区栄3丁目27番30号武馬ビル2F  
 (地下鉄矢場町◎出口より徒歩3分、矢場公園◎東)

Violin Expert and Maker — 電話 (052)264-4601

※御来店前にアポイントメントをお願い致します。

